

◆ 古来軸組建物の原形・変遷。

古来の建物(住宅)は人間生活をいとなむ容器とも考えられる。あらゆる建築は程度の差はあれ人間の住に対する要求を実現するためにつくられたものであるが。そのなかでも最も直接的に要求にこたえるものが住まい(住宅)であると考えられる。

とくに家族生活が営まれるものをさすことが多い。原始時代における建物の種類は住まいだけで、人間生活は戸外労働などをのぞいてすべて住宅内で行われた。

しかし、時代が進み生活が複雑になるにつれて、しだいに各種の用途をもった建物が現われてくる。これを住まい側からみれば、戸内における人間の生活全体をいれる容器であった住宅から、いろいろの機能が戸外に分化していったとみられることができる。

たとえば、古代における、倉庫・作業場(物づくり)・宗教(社寺)建築などが発生して変遷していった。

弥生時代の住居が竪穴住居は最初直接地上に屋根がつくられて直接土間生活が、しだいに壁をつくるようになり床板張の生活になっていき平地住居となっていった。また稲の栽培とともに穀倉が必要となり高床住居や高床穀倉が発生し発達していった。

◇ 合掌造りの発達 ~ 上記述の住居が変遷し、合掌造りが発生し、茅葺の切妻造。または入母屋造で、巨大な合掌(又首(さす)ともいう)を組み、妻を大きく見せ、屋根裏を二から四層にもわけている特徴から名付けられた民家の一類型である。

合掌造りの軸部や梁組、細部手法など構造に特徴をあらわした民家の造りで、軸組には、上屋(はうや)と下屋(げや)から構成される構造法ある。地方よって上屋と下屋の構造の特徴をあらわし、「鳥居建」・「四つ建」・「ふた側造り」・「枿の内造り」・「ちょうな造り」、など土地や地域で生まれ育った呼称である。

◇ 寝殿造り、宮殿造り、公家住宅などの発達 ~ 上記述の住居が変遷し、また大陸からの仏教が渡来し影響をうけ発生して変化発達していく。建物の中央部分が、(母屋(おもや))、で社寺建築では(身舎(みしゃ))という、母屋の四面か何面かに設けた部分を(廂(ひさし))、また廂の四面か何面かに設けた部分を、(裳階(もこし))、という。

母屋(身舎)と廂を一体的な構造とし屋根造りとしこれを、(本屋(ほんや))、という。

裳階は、庇屋根を架けた緩衝空間であり、裳階屋根を俗に、下家屋根、差掛け屋根という。

母屋(身舎)部分は、横架材と軸柱との仕口(独鉤締め)固定により

※ 特に耐震性に優れている。

◇ 斗拱(ときょう)の発生。~ 社寺・宮殿などの建築には、軸組の柱の上(軒下)や、縁下あるいは内部天井下の周辺などに、いろいろな木を組んだ繁簡さまざまな構造が用いられているのが普通である。この木組を斗拱というもので、また斗組(ますぐみ)、斗組(とぐみ)、組物(くみもの)、などともいい、俗に升形(ますがた)、などともいう。

※ 斗拱は優れもの。~ 軸組は種々の貫材で固定し耐震・強風に強い軸組の上に斗拱(斗組)の上に屋根小屋組とし、外力に対し、軸と小屋との緩衝部位としての部材である。